様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００６１０

研究課題名（和文）『阿毘達磨集論』に対するチベットの注釈伝承に関するXMLによるテキスト分析

研究課題名（英文）Textual Analysis of Tibetan Commentarial Traditions on the Abhidharmasamuccaya Using XML

研究代表者
高橋　晃一（Takahashi, Koichi）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：７０３４５２３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,500,000円

研究成果の概要（和文）：インド仏教の瑜伽行唯識派の文献『阿毘達磨集論』に対する『カダム全集』所収のチベット撰述注釈書について、XMLを利用して構造を分析できる電子テキストを構築した。『カダム全集』は2006年から2016年にかけて刊行された新出資料であり、その中に『阿毘達磨集論』に対する11本の注釈が収録されている。これらのうち、特に重要と思われる2点について電子テキストを作成し、また同時に内容の分析を試みた。その結果、これらの資料がチベット仏教、インド仏教の理解に資するものであることを、具体的に示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
インド仏教の唯識思想に関する文献『阿毘達磨集論』に対する『カダム全集』所収のチベット撰述注釈書に関して、XMLにより構造を分析できる電子テキストを構築した。その成果を2018年9月に東京で開催された国際学会TEI 2018において、報告したほか、『『阿毘達磨集論』の伝承－インドからチベットへ、そして過去から未来へ－』と題して、2021年3月に出版した。この書籍は専門性の高い資料を扱ってはいるが、これからインドやチベットの仏教を学ぼうとする人向けに、チベット語仏教文献の電子化に伴う課題と、『カダム全集』所収の『阿毘達磨集論』の注釈に見られるいくつかの重要な論点をわかりやすく解説したものである。

研究成果の概要（英文）：This research project has produced e-texts of Tibetan commentaries on the Abhidharmasamuccaya preserved in the collected works of the bKa' gdams Sect. These commentaries, which are newly discovered Tibetan Buddhist archival materials, were published from 2006 to 2016. There are 11 commentaries on the Abhidharmasamuccaya in total. Our project focused on two commentaries composed by famous Tibetan monks. We produced e-texts with XML in order to analyze the complex structure and contents of the Tibetan commentaries. This study shows that these Tibetan works are useful sources not only for understanding Tibetan Buddhism but also for comprehending Indian Buddhist thought.

研究分野：インド仏教

キーワード：唯識　阿毘達磨集論　カダム全集　瑜伽行派　インド仏教　チベット仏教

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究では、2002 年以降にチベットのデプン寺などで発見された古文書を集めて刊行した『カダム全集』に『阿毘達磨集論』の注釈が多く収蔵されていることに着目し、チベット撰述文献の研究が、インド仏教文献研究に資するものであることを具体的に示すことを試みた。

『阿毘達磨集論』（*Abhidharmasamuccaya*）は、インド大乗仏教の一学派である瑜伽行派の創始者のひとり、アサンガ（５世紀頃）に帰せられる。瑜伽行派の思想は唯識思想とも呼ばれ、外界の対象は認識の結果に過ぎず、実在しないと主張したことで知られている。『阿毘達磨集論』は唯識思想の見地に立ちながら、従来の伝統的なアビダルマ仏教にならって、いわゆる五位百法のもとになる法体系を整備しており、唯識思想とアビダルマの関係を知るうえでも重要な文献である。

『阿毘達磨集論』はサンスクリット語で著されていたが、今日では部分的に伝わるのみで、全体の約５分の３は失われている。2009 年に、失われていた部分を補う原典写本が発見され、それに基づく校訂研究が発表されてはいるが、断片的なものであり、今もって全体像は漢訳とチベット語訳で知るほかない。こうした状況にあって、『阿毘達磨集論』のチベット語訳は思想研究のために重要な意義をもっている。

このチベット語訳『阿毘達磨集論』に対しては、チベット撰述の注釈書が複数あることが、以前から知られていたが、これに加えて、2006 年から刊行された『カダム全集』には、計 11 本の注釈が収められていることがわかった。これらの注釈はチベット語の訳文の難読箇所の理解に資するだけでなく、関連する他の文献を挙げている例もあり、インド仏教研究者にとっても貴重な情報を伝えている。しかし、インド仏教研究という観点で『阿毘達磨集論』を扱う際に、チベット撰述の注釈書を参照する研究はあまり見られない。その背景として、インド仏教研究者がインド仏教における理解とチベット仏教での解釈を意図的に峻別し、慎重に扱おうとしていることが考えられる。しかし、それだけではなく、チベット撰述の『阿毘達磨集論』の諸註釈が、注釈対象である本文と比べて極めて浩瀚なものであることも理由の一つと考えられる。言い換えると、チベット撰述の注釈について容易に内容を把握し得ないため、包括的な研究が進まないとも言える。研究開始当初、こうした状況の改善が強く求められていた。

２．研究の目的

すでに述べたように『阿毘達磨集論』はインド大乗仏教の瑜伽行派の初期の文献であり、５世紀頃の成立と考えられている。この『阿毘達磨集論』は８～９世紀頃、チベットに伝わり、チベット語に翻訳されたが、このチベット語訳『阿毘達磨集論』に対して、１２世紀頃から複数の注釈書がチベットの学僧によって著されるようになった。そうした注釈の一部は古くからその存在が知られていたが、『カダム全集』には『阿毘達磨集論』のチベット語訳に対する注釈が計 11 本、収められており、その中には比較的古いものや、重要な思想家の注釈が含まれていることが分かった（目録によれば 12 本となるが、そのうちの 1 本は全く別な文献に対する注釈であることが、本研究の過程で判明した）。こうしたチベット撰述の注釈書では、ほかの瑜伽行派文献との関連や、インド由来の諸学派の思想との関係が分析されている。こうした観点は現代の研究者にも通じるものであり、『阿毘達磨集論』に対するチベット撰述の注釈書の内容を容易に把握することができれば、研究者は 12 世紀前後からチベットで既に知られていた情報を前提に研究を進めることが可能になる。

しかし、注釈対象である『阿毘達磨集論』に比して、チベット撰述の注釈書はいずれもかなり大部の注釈で、その全体像は容易には把握しがたい。そのような状況にある『カダム全集』所収の『阿毘達磨集論』注釈に関して、本研究では特に重要と目されるパン・ロツァーワとチョムデン・リクペーレルティの注釈を中心に取り上げ、電子テキスト化し、XML により構造化することを目指した。これにより研究者が必要とする情報を比較的容易に取り出せるようになり、また将来的には今回取り上げていなかった諸注釈の電子化についてもモデルを示すことができる。

３．研究の方法

『阿毘達磨集論』に対するチベット撰述注釈としては、プトゥン・リンチェントゥプ（1290-1364）をはじめ、ロトゥー・ギェンツェン（1312-1375）、タルマ・リンチェン（1364-1432）、シャーキャ・チョクデン（1428-1507）のものがよく知られていたが、近年『カダム全集』の刊行により、さらに 11 本の注釈が加えられることになった。これらすべての内容を整理することが求められるが、いずれも『阿毘達磨集論』原典の二倍から三倍に近い浩瀚なもので、一時に扱うことは難しいため、優先順位の高いものから扱うこととした。

先に挙げたロトゥー・ギェンツェン以下の三名は、大翻訳官として知られるパン・ロツァーワ（1276-1342）の系譜を引いていることが従来の研究で指摘されていた（①井上智之[1986:(172)]）。このパン・ロツァーワの注釈は、2016 年に刊行された『カダム全集』の第四輯に収められており、これによって、はじめて内容を確認することができるようになった。後の注釈家に与えた影響を考えるとまず取り上げるべき文献と考えられた。また、2007 年刊行の『カ

ダム全集』第二輯には、チョムデン・リクペーレルティ（1227-1305）の『阿毘達磨集論』注が収められている。この人物はナルタン寺の写本大蔵経の作成に携わった学僧であり、時代的にはパン・ロツァーワに先行するため、明らかに重要度が高い。したがって、この両者の注釈は、優先的に分析するのにふさわしい文献と判断した。

本研究ではこの二つの注釈に関して、ウェブ上で利用可能な形で公開することを念頭に、コンピュータ言語である XML(Extensible Markup Language)を利用して電子テキストを作成した。XML 文書の作成にあたり、人文学分野の電子データ構築に関するガイドラインである TEI:P5 に準拠することを試みた。ただし、TEI:P5 は主に英語を中心としたヨーロッパの言語を前提に策定されているため、チベット語文献や仏教文献の分析にそのまま適用できるわけではない。チベット語仏教文献のもつ固有の特徴に配慮しながら、TEI:P5 を応用する手法について検討し、今後のチベット仏教文献の電子化のための指標となるようなモデルの構築を目指した。

４．研究成果

『カダム全集』所収の『阿毘達磨集論』に対する注釈について、パン・ロツァーワとチョムデン・リクペーレルティのテキストを電子化し、それに対して TEI:P5 に準拠した XML 文書としてタグ付けし、基本的な構造化を行った。その成果の一部はウェブサイト上で公開している（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~tib_asbh/ASBh/xml/ASBh_bcom_ldan_2.xml）。また、テキストの電子化、および XML 文書としての構造化の過程で得られたいくつかの知見をまとめて、『『阿毘達磨集論』の伝承－インドからチベットへ、そして過去から未来へ―』と題する書籍として 2021 年 3 月 21 日に刊行した（②高橋・根本[2021]）。この書籍にまとめられた研究成果は以下の通りである。

（１）『カダム全書』の目録の第 3 部（③『噶当文集』第三部目録）第 81 巻（p.142）に登録されている『大乗阿毘達磨修論注解』（仁青慈成 Rin chen tshul khrims 著）は、実際に内容を検討したところ、『阿毘達磨集論』の注釈ではなく、ディグナーガの『集量論』、またはダルマキールティの『量決択』に対する注釈であることがわかった。結果として、『カダム全書』所収の『阿毘達磨集論』注釈は、計 11 本であることが判明した。

（２）『阿毘達磨集論』の題名にもなっている「アビダルマ」という仏教特有の概念について、チベット人学僧の解釈が明らかになった。チベット仏教の伝統においては、全般的な傾向として、ヴァスバンドゥの『阿毘達磨倶舎論』の冒頭で説かれる「アビダルマ」の定義を継承している。『阿毘達磨倶舎論』では「アビダルマ」は「人間存在を構成する五要素（五蘊）を伴う汚れのない智慧（無漏智）」と定義され、それに至るための知識を集めた書物として、仏教の論書とよばれる典籍が通俗的には「アビダルマ」と称されると説明される。その結果、「アビダルマ」は仏教の論書を指す語として定着するが、チョムデン・リクペーレルティは「アビダルマ」の本来の定義である「五蘊を伴う無漏智」に着目し、その定義によって示される対象は声聞・独覚・菩薩・仏であるとする。すなわち「アビダルマ」とは単なる仏教の典籍ではなく、仏道の修行者、あるいはその体現者という存在であることになる。この解釈はチョムデン・リクペーレルティに特有のもので、パン・ロツァーワやプトゥンなどの解釈とは傾向が明らかに異なっているが、「アビダルマ」の本来の定義に即しており、重要である。

（３）『カダム全書』所収のションヌ・チャンチュプ（生没年不詳）の著した『阿毘達磨集論』の注釈において、仏教史と仏教学説を概観した後に、唯識派の立場から『阿毘達磨集論』を注釈するという手法を取っているが、その仏教学説の解説において、従来のチベット仏教の一般的な理解とは異なる解釈が示されていることが明らかになった。特に中観派の分類について、如幻派と無住派の分類に言及し、後者についてより詳細に分類したうえで、それに関係するチベット人学僧の名を具体的にあげていることがわかった。如幻派・無住派の分類は以前から知られていたが、無住派に関する詳しい伝承はこれまで知られていなかった。

（４）チベット撰述文献の XML による構造化記述を試みたが、その際、サチェーとよばれるチベット文献特有の詳細な科文構造をガイドライン TEI:P5 に準拠してタグ付けする方法を提案した。サチェーは、法律の条文が条・項・号と細分化されるのに似た階層構造を有している。すなわち文章を項目に分類し、各項目をさらに細分化するということを延々と繰り返している。TEI:P5 が想定する文の構成は、part、chapter、section、paragraph などのように、意味のまとまりによる分析である。あるいは法律の条文のような構造は division として整理することになるが、サチェーの細分化は TEI:P5 の想定を超える細密なものである。しかしながら、本来、階層構造と XML は親和性が高いので、division の使い方を工夫することで、サチェーを構造的に記述し、今後の利活用に資するものとした。

＜引用文献＞

① 井上智之[1986]「チベットにおける『阿毘達磨集論』の伝承」『印度学仏教学研究』35-1,(172)-(174)

② 高橋晃一・根本裕史他[2021]『『阿毘達磨集論』の伝承－インドからチベットへ、そして過去から未来へ―』、文学通信、2021 年 3 月

③ 『噶当文集』第三部目録、bKa' gdams gsung 'bum phyogs sgrig thengs gsum pa'i dkar chag （『噶当文集』第三部目录）、四川民族出版社、2009 年 12 月

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 根本裕史	４．巻 68(3)
２．論文標題 Tsong kha pa's Madhyamaka Philosophy in the Formative Period	５．発行年 2020年
３．雑誌名 印度学仏教学研究	６．最初と最後の頁 158-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 根本裕史	４．巻 17
２．論文標題 『サダープラルディタ・アヴァダーナ』研究	５．発行年 2020年
３．雑誌名 比較論理学研究	６．最初と最後の頁 15-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 根本裕史	４．巻 70
２．論文標題 Emptiness and Fear in the Madhyamaka Philosophy in India and Tibet	５．発行年 2018年
３．雑誌名 哲学	６．最初と最後の頁 155-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 根本裕史	４．巻 108
２．論文標題 書評・紹介：福田洋一著『ツォンカパ中観思想の研究』	５．発行年 2018年
３．雑誌名 仏教学セミナー	６．最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根本裕史	4．巻 16
2．論文標題 中観思想と歌：『知見の歌』研究（2）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 比較論理学研究	6．最初と最後の頁 13-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/47670	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 高橋晃一
2．発表標題 唯識思想における他者
3．学会等名 日本哲学会第78回大会（学協会シンポジウム）（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 高橋晃一、根本裕史
2．発表標題 How to Encode the Tibetan Commentaries on the Abhidharmasamuccaya
3．学会等名 The 18th Annual TEI Conference and Members’ Meeting（国際学会）
4．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

1．著者名 下田正弘／永崎研宣／高橋晃一ほか	4．発行年 2019年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 383
3．書名 デジタル学術空間の作り方	

1．著者名 Yoshimizu Chizuko , Nemoto Hiroshi , Kano Kazuo	4．発行年 2018年
2．出版社 東洋文庫	5．総ページ数 87
3．書名 Zhang Thang sag pa ’Byung gnas ye shes, dBu ma tshig gsal gyi ti ka, Part II (Edition)	

1．著者名 扎布、根本裕史	4．発行年 2018年
2．出版社 中国蔵学出版社	5．総ページ数 268
3．書名 迦梨陀娑《云使》訳注与研究	

1．著者名 高橋 晃一、根本 裕史	4．発行年 2021年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 162
3．書名 『阿毘達磨集論』の伝承	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	根本　裕史 (Nemoto Hiroshi) (00735871)	広島大学・文学研究科・教授 (15401)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関